

千砂子波止と高燈籠

19 世紀に入ると、御手洗の港町としての優位性は、競合の港の増加によって脅かされるようになった。同時に航路も変化され、かつては関東の南側にあった船が、四国の北岸に沿って港から港へと移動するようになり、北東からではなく、南東から御手洗に接近するようになった。この新しい航路を利用する船を誘致するために、御手洗港の南側に防波堤を設けた。この大規模な工事は、広島藩からの資金調達が度々遅れ、その数年前に合法化された地元の宝くじで資金を調達して、1829 年によりやく完成した。

千砂子波止は全長 120 メートルで、中四国地方最大の防波堤で、当時としては技術的にも高度なものであった。城壁の築城にも使われた「牛蒡積み（ごぼうづみ）」と呼ばれる方法で、大きな石をしっくいを使わずに積み上げている。防波堤の外側には、波の衝撃を和らげるために曲面の壁を設けている。1830 年には、御手洗港の繁栄と港を守るために、千砂子波止の守護神として住吉神社が建立された。この防波堤は、多くの台風にも耐え、現在も現役で使用されている。

この防波堤の先端には、御手洗に近づく船を誘導するための灯台がいくつも立っていた。最初の灯台は木造であったが、度重なる暴風雨で大きな被害を受けた。1832 年に金子商家の資金で、より頑丈な石造りの灯台が建てられた。この灯台は高さ 6 メートルで、伝統的な高燈籠を模して建てられた。この高燈籠は 1879 年まで使用されていたが、住吉神社への参道に移設された。現在は防

波堤の先端にコンクリート製の新しい灯台が建っている。これは、元の石造灯台の建築様式を再現して建てられた。

防波堤に並ぶ大きな石は、船を固定するためのもので、漢字の数字が彫られている。防波堤の足元の石には、亀と鶴が彫られている。どちらの動物も繁栄と長寿の象徴であり、御手洗が港町として未
永く繁栄してほしいという願いが込められている。これらの石に触れると幸運が訪れると言われている。
千砂子波止と高燈籠は、御手洗の港町としての過去と現在を象徴する重要なものであり、江戸時代(1603-1867)の面影を今に伝えている。